

Try & Challenge

越谷の YES, WE CAN.

第11回マニフェスト大賞

私も運営委員の一人として参加している「埼玉政経セミナー」が、地方政治の優れた取組を表彰する「第11回マニフェスト大賞」市民部門で優秀賞をいただきました。埼玉政経セミナーは、「市民が参加し責任を持つ地域づくり」を目指す、市民と超党派議員でつくる団体です。

2011年、2015年の2度の統一地方選挙においてマニフェストを共同作成。選挙後は点検・検証・推進を行い、講座や勉強会も開催してきました。実はマニフェスト大賞を受賞するのは今回が2度目。1度目は2014年、「超党派議員が同じマニフェストを掲げ選挙に挑む」ことが評価され、議会部門での受賞でした。

選挙後はより進化し、市民が中心でマニフェストを実現しています。運営を市民が座長を務める分科会形式にし、「新しい豊かさ」では幼稚園・小学校に自然エネルギー発電所と防災拠点を設置。「新しいしくみ」では、地元の学生さんと協働で議会との交流会を開催。「新しい公共」では、これからの公共施設の運営方法を考える「公共施設シンポジウム」を開催しました。

これらの活動全て、市民が発案し実施、議員がサポートと、役割分担を徹底したことが、今回の受賞に繋がったと考えています。ただ、課題



もありません。メンバーの中で考え方や行動への温度差があるのも事実です。賛同議員の離脱や、役員にお任せになってしまふ場面もたまに見られます。

それでも、私たちが活動してこられたのは、特別な市長・議員・市民がいるわけでも、超党派だからでもありません。あきらめない市民と議員がいたからです。

市民が変わらなければ議会は変わりません。あなたも政経セミナーに参加しませんか？

(越谷市議会議員 山田裕子)

12月シンポジウムパート3に向けて

今回のシンポジウムの目玉は「下流老人」著者の藤田孝典さんです。

「なぜいま下流老人か」をテーマにご講演頂きます。実は、私は藤田さんのお話を伺うのは今回が初めてです。それなのに第二部のパネルを仰せつかり、一緒にトークさせて頂くというありがたい企画です。ですから、どんな話が飛び出すか、私自身も楽しみな内容というのが本音です。私がお話しさせて頂くのは、ひとりのママの立場から子育て支援の現場に関わる中で感じたことを「貧困の連鎖」というキーワードを元に率直にお話しできればと考えています。

現場の声という聞こえはいいですが、私の関わる子育ての現場をある一つの事例にすぎないと捉えるか、そこから社会構造を見るという視点に立つかで意識が変わってくると思います。

発信者であるママが、「これは私事ですが」と言って語り始めた時、そこに共感者が生まれ、次々とシェアされていく時に、それは「私事では済まないこと」として「みんな」が考え始める土壌ができます。そのことが今、どの現場においても大切な場の持ち方ではないかと思えます。そして、そうした様々な現場の当事者同士が繋がり合う仕組みをこれからはもっと増やしていく必要があると思えます。異質なもの同士の話し合いの中でこそ、負の連鎖を断ち切る原動力になるのではないかと考えています。このシンポジウムがその呼びかけになればと思っています。



(主婦 尾澤あきこ)

越谷市は本議会傍聴だけでなく、会派代表会議や議員運営委員会、四つの常任委員会等の傍聴を保証しています。しかし、いずれも平日の開催であり、それらを傍聴するとすると現役世代は会社を休まなければならぬし、子育て、家庭の主婦たちもなかなか時間をやりくりしてまで傍聴したいとはなっていない現状があります。そこでライブ中継や録画中継のインターネット配信を要望していますが、足掛け6年になっており、やっと来年6月に実施の目途がたとごといいています。

「市民が好きな時に見ることができ」という市政への市民参加は32名の議員全員が異論のないところでありますが、情報公開がようやく一段階進もうと評価できます。昨年、市民請願も採択となりましたが、市民の思い(市民請願)が議会を動かしたあの行動が無駄ではなかったと思います。全国各地で行なわれる選挙の投票率は、30%台まで落ち込んでいる現状があります。

しかし、ここには隠れた民意があることも事実であり、このような民意を掘り起こすためにも議会のライブ中継がきっかけになればと考えています。議会改革は、議会だけのものではなく、私たち市民の生活に直結した課題をこれからも討議されていくはず。例えばは全会一致を原則としていることを理由に、次の一歩を先送りしたりするかと思えば、9月議会時の市民請願「国旗・市旗の議場への掲揚を求める」についての議論では、多数決を優先するということも発生させています。その意味で、越谷の民主主義観は、このレベルであり、一昨年の市議会選

挙で生まれた新人議員に期待するところ大ありますが、悪いことを「悪」と認めながら、一歩を踏み出せない状況があるとしたら、むしろ、越谷民主主義の改革などという資質はどつなつたかを、もう一度、自らの心に問いかけてほしいものであります。

(大竹在住 西川孝一)

4地区議員有志の会 第1回市政報告会

11月5日土曜日夕方、越谷市北部の4地区(大袋、新方、桜井、大沢)の議員有志8名が主催した市政報告会が北部市民会館で行われました。自治みらいより白川秀嗣議員・菊地貴光議員・辻浩司議員、保守無所属の会より小林豊代子議員、民進党と無所属の会より福田晃議員・松田典子議員、共産党越谷市議員より宮川雅之議員・山田大助議員が出席し、与野党両方の立場から議論する活発な会となりました。

テーマは平成28年9月議会で議題になった市長提出議案、議員提出議案と意見書、決算認定、市民請願(議場に国旗・市旗を掲揚を求める件)、政務活動費についてなどで、会場に集まった市民の方々からも市政について様々なご意見をいただき、2時間があつたという間に経過してしまいました。

今回の市政報告会を開催するにあたり、「多様な市民に対応するには、多様な市議が参加することがよい」ということを目的と意義としました。5年前、32人の議員全員が主催する市政報告会を試行し、プラスもマイナスもはっきりさせて行おう、ということでしたが、「自分の支持者でない市民からあれこれ言われて不愉快だ」という意見があり、その後は開催されなくなつてしまつたそうです。

私も状況に応じて臨機応変な対応ができるほどまだ技術がなく、もし批判的なことを言われたら泣きたくなつてしまつたかもしれませんが、今後は「33万8千人の市民がいれば、いろいろな意見があつてあたりまえ」と楽しむくらいの気持ちで今後も実施してまいりたいと思つておりますので、みなさまのご参加をお待ちしています。

(越谷市議会議員 松田 典子)



相互扶助の精神は 「ALL FOR ALL」

英国の国民保険サービスNHSは「病気とは、人々が金銭を払ってする道楽ではないし、罰金を支払わなくてはならぬ犯罪でもない。それは共同体がコストを分担すべき災難である」と

し設立されました。これよりも先んじ、この越谷においては「相互扶助」の仕組みが育まれていました。病は貧困からとの憂いが、世界でも先駆的な健康保険制度のアイデアを生み出しました。

血縁で結ばれた人間関係を基礎とする支え合いに地縁という概念を具現化し、社会の一員を社会で守る善行政治が行われたのです。小さな分母で同等の分子を支える血縁から、地縁という大きな分母への転換を行いました。そして時代が変わり、高度経済成長期には道路や水道・下水道や公共施設の社会インフラを局地に集中させ、整備費を抑えつつ労働力の確保が必要となりました。

そして都市に人口を集中させてしまったのです。血縁で結ばれた人間関係は離れ、地縁の薄い土地へ移り住む人々は職場に濃い人間関係を作ります。こうして社会保障は企業が担うようになっていきました。そして終身雇用という自己保存の下に労働市場の健全化を代償にしてしまいました。

そして、経済停滞と言われる現在は正社員としての保障の傘から外れた雇用形態が増加しています。正社員という恵まれた社会保険・雇用保険・介護保険・労災保険・厚生年金保険等の傘の下にいと日本は社会保障が厚いような気がします。

しかしながら、そこから外れた者には冷たい社会です。外れた者など存在しないかのような社会です。外れた者がいても自己責任と攻撃します。分母が分子を攻撃する事は我が身を傷つける事なので、分子を守る事は分母を守る事であり、共同体に属する我が身を守る事です。同音

ではない協和音を生み出し、同感によって社会秩序が保てるのです。

(越谷在住 辻純志郎)

